様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２８ 日現在

機関番号：３７１０５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２３７１

研究課題名（和文）20世紀初頭のアイルランド小説における階級表象について

研究課題名（英文）Reflections on some Representations of " Class" in Twentieth-century Irish Novels

研究代表者
河原　真也（Kawahara, Shinya）

西南学院大学・文学部・准教授

研究者番号：８０４５４９２４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）： 本研究はJames Joyceら、20世紀初頭のアイルランド社会を扱った小説において「階級」がどのように表象されていたかを検証することで、当時の社会問題への作家の意識を明らかにすることである。プロテスタント（支配者）対カトリック（被支配者）という宗派対立の構造が強調されてきた従来のアイルランド研究に対して、本研究ではカトリック系アイルランド人の中に存在した階級対立の構造を、学校や聖職者を扱った小説の中に見出し、20世紀初頭のアイルランド社会の新たな一面を掘り起こしながら、負の歴史に傾きがちなナショナリスティックなアイルランド文学研究からの脱却を試みた。

研究成果の概要（英文）：How "class" was represented in novels by James Joyce, George Moore and other influential Irish writers was investigated in this study. By so doing, the artists' consciousness of social problems in Irish society at the time have been explored. In contrast to traditional Irish studies in which the structure of sectarian conflict: Protestant (the ruler) versus Catholic (the ruled), has been emphasized, this study examined the unique structure of class conflicts among Catholic Irish people, focusing on some representations of Catholic clergy and schools depicted in certain novels. I tried to break from a nationalistic view of Anglo-Irish literature research that tends to view this period in a negative way and instead concentrate on new aspects of Irish society at the beginning of the 20th century.

研究分野：英語圏文学

キーワード：階級　アイルランド　アイルランド小説　James Joyce

１．研究開始当初の背景

20 世紀のアイルランド研究において、長年にわたって避けられてきたテーマの一つが、Diarmaid Ferriter がその著書 *The Transformation of Ireland: 1900-2000* (2004)で指摘したように、カトリック教徒の中での階級対立といった問題である。19 世紀後半以降のアイルランドの文化ナショナリズムにおいて、イングランドとの差異を明らかにするうえで、「アイルランド語」と「カトリック信仰」が民族の精神的支柱とされていた。故に一枚岩であるはずのカトリック信仰の根幹を揺るがすような矛盾を露呈させることはタブーとされたのである。独立後に長く経済的苦境に陥り、また 1960 年代後半以降北アイルランド紛争によって負のイメージが付きまとったアイルランドにおいては、カトリック教徒が互いに思想や利権をめぐって対立していたという事実には正面から向き合えなかったという実情もある。

文学研究においても、階級という視点を扱う際は、支配層を構成していたプロテスタント系の Anglo-Irish（イギリス系アイルランド人）と Irish（カトリック系アイルランド人）との格差という点が強調されてきた。事実、作家はそういった宗派に基づく対立構造を、Anglo-Irish（プロテスタント）が居住していた Big House (Country House)という植民地支配を象徴する建築物を作品に投影させ、斜陽状態にあったプロテスタント系の支配層を描いてきたといえよう。

しかしながら、カトリック教徒の中にも、「独立」に対して階級差による意識のずれが存在していたことは、いくつかの事例で明らかになっている。例えばイースター蜂起(1916)の際、ダブリンの中央郵便局周辺で独立のための死闘が行われている一方で、労働者階級の一般市民は周辺商店の略奪に励んでいたという事実がそれを裏付けていよう。Roddy Doyle の小説 *A Star Called Henry* (1999)においても、略奪にはげむ労働者階級の女性登場人物に、独立よりも日々の糧を得るのが優先だとのセリフを吐かせている。英国支配へのルサンチマンから、独立を絶対視するナショナリストたち（その多くが中流下層階級出身であった）が、国家としての独立は二の次だとする労働者階級の考え方を無視していた事実は、20 世紀初頭のアイルランドのナショナリズムが抱えていた矛盾を象徴する事例であろう。

カトリック教徒内で階級内闘争があったという点は、昨今の歴史学の分野では通説になりつつある。しかしながら、アイルランド文学の研究者はこの視点よりも、プロテスタント対カトリックという宗派対立を優先し、植民地下のアイルランドにおける「支配」「被支配」という二項対立の構造に拘る傾向があることは否定できない。北アイルランド紛争が活発化した 1970 年代以降、IRA による軍事闘争が活発化し、プロテスタント対カトリックという対立構造が以前にも増して世界的に注目される。また北アイルランドにおいて公民権が制限されていたカトリック教徒に対する共感も、アイルランドにおける搾取されたカトリック教徒というイメージが定着化した要因の一つであろう。そして 1980 年代になると、Seamus Deane、Seamus Heaney らよって組織された Field Day Group が、ナショナリスティックな評論活動を展開し、ポスト・コロニアリズムの隆盛も受け、アイルランド研究において「被支配者」としてカトリック教徒という構図をもとにした文学研究が確立されるに至った。

ジェイムズ・ジョイス研究においても、Vincent Cheng の *Joyce, Race and Empire* (1995)などがその立場で書かれている。ジョイスは短編集 *Dubliners* (1914)において、20 世紀初頭のダブリンに生きる中流階級を描き出している。とりわけ、英国支配下のアイルランドにおいて、経済的豊かさを享受していたカトリック系中流上層階級の描写は、従来のアイルランド社会理解を覆す事例として無視することはできない。“Castle Catholic”と揶揄された彼らは、当時のナショナリストたちからは民族の裏切り者として扱われ、徹底的に攻撃されていた。そういう風潮の中でジョイスが、ナショナリストとは相反する立場の「豊かな」中流上層階級を、その中の短編「死者たち」や「レースの後で」などで描き出している事実は、20 世紀初頭のアイルランド社会の新たな一面を知る上でも有益である。

同時に、そのカトリック系中流上層階級に対して、労働者階級の人びとをさりげなく *Dubliners* の物語の脇に配置し、彼らの住むスラム地域の劣悪な集合住宅等を描出することで、当時ヨーロッパで最悪であったとされるダブリンの住居問題をジョイスがクローズ・アップさせた点にも目を向けなければならない。こういった彼の行為は、中流上層階級に属する人間の社会問題への無関心さや、中流下層出身者が多くを占めるナショナリストたちの理想主義を浮かび上がらせ、そこにカトリック教徒内に存在していた階級対立を読み解くことが可能となるはずである。

２．研究の目的

本研究は、平成 24～26 年度の基盤研究（C）「20 世紀アイルランド小説におけるイースター蜂起の表象について」を引き継ぎ、20 世紀初頭のアイルランド小説において「階級」がどのように表象されていたかを検証することで、当時の社会問題への作家の意識を明らかにすることである。

プロテスタント（支配者）対カトリック（被支配者）という宗派対立の構造が強調されてきた従来のアイルランド研究に対して、本研究ではカトリック系アイルランド人の中に存在した階級対立の構造（中流上層階級／中流下層階級／労働者階級）を、学校や聖職者を扱った小説の中に見出し、ナショナリズム

が勃興していた 20 世紀初頭のアイルランド社会の新たな一面を掘り起こしながら、負の歴史に傾きがちなナショナリスティックなアイルランド文学研究からの脱却を試みた。

３．研究の方法

本研究では、まずジェイムズ・ジョイスの小説が舞台となっている 20 世紀初頭のアイルランドにおける社会状況を、最新の歴史研究や定期刊行物による検証をもとに精査した。特に対象としたのは、19 世紀後半から 20 世紀初頭のアイルランド社会史に関する研究書である。これは文学研究者の偏向的な歴史認識と距離を置くためにも必要な作業であった。

それを踏まえて、ジョイス作品に描写された「階級問題」に考察を加えたが、ジョイスと同時代の作家（George Moore や Canon Sheehan）による「学校」やカトリックの「聖職者」を扱った小説も研究対象とした。そして作品に投影された、当時の都市や農村が抱えていた社会問題をあぶり出し、中流上層階級に属するカトリック教徒の視点と、中流下層階級のそれとの違いを比較・検証することで、アイルランド社会の新たな諸相を明らかにした。そのうえで、英国支配下のアイルランドにおいて、一枚岩とされてきたカトリック教徒内での思想対立が存在していたことを確認し、20 世紀初頭のアイルランド社会をアイルランド人作家がどうとらえていたかについて見解を示すこととした。

４．研究成果

① 2015 年度

20 世紀初頭のアイルランドの社会状況を、歴史的資料を用いて検証する作業を中心とした。

まず社会史について、Terence Brown の *Ireland: A Social and Cultural History 1922-2001* (2004)をもとに、「じゃがいも大飢饉」後に大きく変容した 19 世紀後半以降のアイルランド社会におけるいくつかの事象を取り上げ、アイルランドにおける一般的な見解を確認した。これに加えて、Diarmaid Ferriter の *The Transformation of Ireland: 1900-2000* (2004)によって、21 世紀の視点からみたアイルランド史の枠組みに基づき、アイルランドにおける中流階級の実態を、19 世紀後半から検証する作業も行った。この著作において言及された 20 世紀初頭のアイルランド教育史に関する研究書は注目に値する。特に Senia Paseta の *Before the Revolution* (1999)は、アイルランド独立以前の中等教育と「階級」との結びつきを探るうえで極めて有意義な資料であり、階級問題を考察するうえで中等教育の重要性を再認識することができた。

当年度後半からは、19 世紀後半の世論の動向を把握するため、ナショナリスト系日刊紙 *Freemans Journal* やユニオニスト系日刊紙 *The Irish Times* の記事をいくつか精査することで、独立前のイデオロギーの異なる世論を確認する作業を行った。これはいくつかの歴史的出来事に対して、階級間で異なる考え方が存在していたことを立証するための作業でもあった。 最終的には、カトリック教徒に高等教育の環境を整えようとした「大学問題」と階級との関わりをもとに、James Joyce の *Dubliners* にみられる「階級」表象に関する小論を発刊するに至った。

② 2016 年度

前年度検証した 20 世紀初頭のアイルランドにおける社会状況をもとに、ジェイムズ・ジョイスやジョージ・ムアの小説において、社会問題として階級がどのように表象されているかを検証した。対象としたテクストは、*Dubliners, A Portrait of the Artist as a Young Man, The Untilled Field* である。各作品の登場人物の出自、思想等をテクストから抽出し、アイルランド社会における階級問題へとつなげたが、主に注目したのは教育という視点である。当時の中流階級の子弟は、属する階層や宗派によって通う学校が異なっていたり、高等教育へ進むカトリック教徒の数が限定されたりしていた。これらの諸相に目を向けることで、下層から上層に至る中流階級各層の子弟の社会問題に対する考え方や行動パターンをあぶり出すことが可能となった。*Dubliners* の中の短編「レースの後で」はその実例を示すものであろう。ジョイス作品はダブリンという「都市」を舞台とするが、一方のムア作品は「農村」を舞台とすることが多かったため、20 世紀初頭の「都市」と「農村」との比較が容易となり、結果的にアイルランドにおける階級問題の多様性を把握することが可能となった。

また当時の階級を理解するうえで、Horace Plunkett の *Ireland in the New Century* (1904)は、アイルランド社会における階級格差や宗派対立を考察する際、有益な情報を提供してくれた。プロテスタントであった Plunkett が、カトリック教徒の自立を推進しようとしていた事実は、彼自身が主導した"Co-operative movement"にカトリック系作家の多くが関わっていたことの意味を明らかにすることとなり、アイルランド文芸復興期の文芸サークルの新たな一面を見出すことにもなった。この時期の社会史を裏付ける資料としても 今後大いに活用できよう。

③ 2017 年度

「学校」を舞台とした小説や「聖職者」を扱った小説を検証し、そこに描かれた社会表象を通して、当時のアイルランドにおける「階級問題」をあぶりだしたことが主たる成果である。

Catherine Candy の *Priestly Fictions* (1995)は聖職者を扱った小説や農村を舞台とした作

品についての研究書であるが、当年度もここで扱われた作品の掘り起こしを、前年度に引き続き行った。検証対象としては、George Moore に加え、Canon Sheehan, Gerald O'Donovan の短編・長編を新たに加えた。特に「農村社会」を舞台にし、当時の階級事情を反映した作品である O'Donovan の *Father Ralph* (1913)を精査する作業に多くの時間をかけることになったが、「地主」「土地持ち農民」「小作人」の関係が鍵となる、農村の階級事情を理解できたという点で、有意義な成果が出たように思える。

同じく「聖職者」と「学校」という題材を作品の随所に取り入れているのが Canon Sheehan である。彼の作品は 20 世紀初頭のアイルランドの中流階級を理解するうえで欠かせない資料として、当時の知識人家庭において必ず読まれていたという。そこで彼の代表作 *My New Curate* (1900)をはじめ、いくつかの小品について考察を加えた。ただ作品群が多く、中流下層階級の思想形成の背景をこれらの著作から探り出せた面はあるものの、若干未消化な面があった点は否めない。

３年間の研究において、20 世紀初頭のアイルランド小説を比較・検証することで、中流上層階級に属するカトリック教徒の価値観と中流下層階級のそれとの違いを明らかにし、アイルランド文学作品の社会的背景を理解するうえで新たな一面を提示できたと確信している。加えて、アイルランド文学研究に際し、プロテスタント／カトリックという宗派対立の構造を「支配」「被支配」という二項対立に適応しようとする解釈への疑義を投げつけることができたように思う。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）
① 河原真也、「「復活祭蜂起の不在をジョイスとその周辺から探る」」、*JOYCEAN JAPAN*（日本ジェイムズ･ジョイス協会)、第 29 号、45-54 頁、査読無、2018 年.
② 河原真也、「『肖像』における"peasant"の表象について―事実と虚構とのずれから探るジョイスの歴史認識」、*JOYCEAN JAPAN*（日本ジェイムズ･ジョイス協会)、第 28 号、40-48 頁、査読無、2017 年.
③ 河原真也「カトリック・インテリゲンチャの台頭と「近代性」への目覚め―アイルランド史に翻弄されるゲイブリエル」、*JOYCEAN JAPAN*（日本ジェイムズ・ジョイス協会)、第 26 号、81-88 頁、査読無、2015 年.

〔学会発表〕（計３件）
① 河原真也、「*Dubliners* における聖職者の「不在」 ―カトリック教会・階級・ナショナリズム」、日本英文学会中国四国支部大会、2017 年 10 月 28 日、就実大学.
② 河原真也、「復活祭蜂起の不在をジョイスとその周辺から探る」（シンポジウム 「ジョイスと復活祭蜂起」)、日本ジェイムズ・ジョイス協会、2017 年 6 月 14 日、京都大学.
③ 河原真也、「『肖像』における"peasant"の表象について―事実と虚構とのずれから探るジョイスの歴史認識」、日本ジェイムズ・ジョイス協会、2016 年 6 月 14 日、法政大学.

〔図書〕（計３件）
① 河原真也、「読者を啓発するジョイス―『ダブリンの市民』に描かれたアイルランド社会の病理」、小林英美・中垣恒太郎編 『読者ネットワークの拡大と文学環境の変化』、音羽書房鶴見書店、132-150 頁、査読無、2017 年.
② 河原真也、「死者たち」にみるカトリック中流階級の諸相―ウェスト・ブリトン／大学問題／アイルランド西部」、金井嘉彦・吉川信編『ジョイスの罠』、言叢社、353-371 頁、査読有、2016 年.
③ 河原真也、「アイルランド人作家が再生産する「ことば」―移民／アイルランド語／アメリカ英語」、結城英雄・夏目康子編『アイリッシュ・アメリカンの文化を読む 』、水声社、67-87 頁、査読無、2016 年.

〔その他〕（計１件）
河原真也、【招待講演】「映画『アルバート氏の人生』にみる 19 世紀アイルランドの格差社会」、福岡映画サークル協議会、2016 年 1 月 24 日、福岡市男女共同参画推進センター・アミカス.

６．研究組織
(1)研究代表者
河原　真也（KAWAHARA, Shinya）
西南学院大学文学部・准教授
研究者番号： 80454924